

溝上 慎一の教育論(動画チャンネル) No344

(新著の紹介)

非認知能力の発達一生涯にわたる変化と影響 小塩真司先生（早稲田大学文学学術院 教授）

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

<https://smizok.com/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。

※公益財団法人電通育英会の助成を受けて行われています。

※本動画では字幕を付けていませんので、必要な方は「設定」で「字幕オン」にしてご利用ください。

(ご紹介)



小塩真司

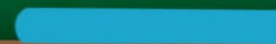
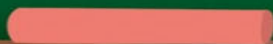
おしお あつし

早稲田大学 文学学術院 教授

名古屋大学大学院教育学研究科修了。中部大学を経て、2012年より早稲田大学、現在に至る。
専門はパーソナリティ心理学，発達心理学

書籍は以下のもののほか多数

- 非認知能力の発達：生涯にわたる変化と影響 北大路書房（編著，2025年，北大路書房）
- 性格診断ブームを問う——心理学からの警鐘（単著，岩波書店，2025年）
- 心理尺度構成の方法：基礎から実践まで（編著，誠信書房，2024年）
- 「性格が悪い」とはどういうことか——ダークサイドの心理学（単著，筑摩書房，2024年）



No20(心理学)

#6 心理学から見ると

「非認知能力」はどのような概念か

—小塩真司先生(早稲田大学教授)にインタビュー—



『非認知能力』をどのような視座で編集したかを聴きました！





小塩真司(編) (2025). 非認知能力の発達—生涯にわたる変化と影響— 北大路書房 (2025年4月刊行)

- まえがき
- 序章 非認知能力の発達
- 1章 心の理論と情動知能
- 2章 自己制御と実行機能
- 3章 動機づけと自己効力感
- 4章 成長マインドセットを養う
- 5章 対人関係スキルとSEL
- 6章 非認知能力と友人関係・仲間関係
- 7章 創造性と問題解決
- 8章 レジリエンスと回復
- 9章 マインドフルネスとストレスへの対処
- 10章 アクティブラーニング論と非認知能力
- 11章 ICTと非認知能力
- 12章 非認知能力の発達における養育者の役割
- 13章 高齢期の非認知能力
- 14章 非認知能力の測定と評価
- あとがき

それではご覧ください

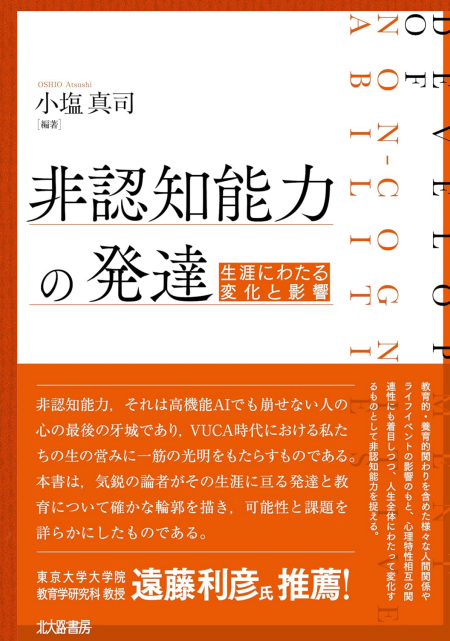
非認知能力の発達

生涯にわたる変化と影響

小塩真司（編集）

北大路書房

2025年



DO NOT
FEEL
YOUR
INTEL-
LIGENCE
THAT
IS

OSHIO Atsushi
小塩 真司
[編著]

非認知能力 の発達

生涯にわたる
変化と影響

非認知能力、それは高機能AIでも崩せない人の心の最後の牙城であり、VUCA時代における私たちの生の営みに一筋の光明をもたらしものである。本書は、気鋭の論者がその生涯に亘る発達と教育について確かな輪郭を描き、可能性と課題を詳らかにしたものである。

東京大学大学院 教育学研究科 教授 遠藤利彦氏 推薦!

北大路書房

教育的・養育的関わりを含めた様々な人間関係やライフイベントの影響のもと、心理特性相互の関連性にも着目しつつ、人生全体にわたって変化するものとして非認知能力を捉える。

OSHIO Atsushi
小塩 真司
[編著]

非認知能力

概念・測定と
教育の可能性

「非認知能力」とは何か。
心理学で実証された15種類の心理特性の研究から、
①非認知能力は教育可能である、
②その教育は望ましい成果(学力や健康・幸福・社会的活動)につながる。
本書から多くを学ぶことができた。
広く教育・保育の関係者に勧めたい。

白梅学園大学 名誉教授 無藤 隆氏 推薦!

北大路書房

誠実性、グリット、好奇心、批判的思考、楽観性、
時間的展望、情動知能、セルフ・コンパッション、
マインドフルネス、レジリエンスなど、非認知能力
と関連する15の心理特性を取りあげ、教育や保育
の現場でそれらを育む具体的方法や可能性を展望。

個人的な関心

- 基本は「個人差概念」への関心
- 「望ましい個人差概念」とは何か
- 社会的にどのような影響力をもつのか

さまざまな概念

- **態度**：ある対象，人，集団または概念に対する，否定的なものから肯定的なものまでの比較的永続的で一般的な評価
- **価値観**：何が善であるか，何が望ましいか，何が重要であるかの指針として，個人または社会に受け入れられている道徳的，社会的，または美的原則。
- **能力**：特定の身体的または精神的行為を行うための既存の能力または技能
- **スキル**：訓練や練習によって身につく能力や技能
- **パーソナリティ（性格）**：行動，価値観，態度，認知などさまざまな個人差のうち，時間と場所を越えてある程度安定するもの。行動や適応の説明概念

非認知能力の条件

- 知能や学力以外であること
 - 実際には「知能検査や学力試験で測定されるものの以外」
- 何らかの望ましい結果をもたらすこと
 - 個人・社会いずれかにとって
- 測定可能であること
 - 「測定が困難」と言われることが多い
- トレーニング可能であること
 - 介入によって変化する
- ※最初の定義以外は知能も学力も当てはまる

非認知能力が注目される理由

1. 知能や学力よりも**介入可能性が高い**という見込み

→ 行動遺伝学による遺伝率の推定

→ 知能への介入の困難さの実証

2. **知能と同程度のアウトカム予測**

→ 学業成績, 学歴, 収入, 心身の健康, 寿命etc

3. **知能や学力への偏重に対する反省**

→ 同じアウトカムをもたらすのであれば

発達

- 人間やその他の生物の生涯にわたって生じる，構造・機能・行動パターンの連続的な変化の過程
- 個人差特性の変化を捉える
 - 平均レベルの変化
 - 順位の変化
 - 構造の変化
 - イプサティブな変化
 - 個人の変化
- 介入・教育・子育てにおいても観点は同様

社会の中での非認知能力育成

- すでに多くの場面で「非認知能力」育成
- 特別なことではない
- 概念を知ることによって焦点が定まる効果も

『非認知能力の発達』目次

- まえがき
- 序章 非認知能力の発達
- 1章 心の理論と情動知能
- 2章 自己制御と実行機能
- 3章 動機づけと自己効力感
- 4章 成長マインドセットを養う
- 5章 対人関係スキルとSEL
- 6章 非認知能力と友人関係・仲間関係
- 7章 創造性と問題解決
- 8章 レジリエンスと回復
- 9章 マインドフルネスとストレスへの対処
- 10章 アクティブラーニング論と非認知能力
- 11章 ICTと非認知能力
- 12章 非認知能力の発達における養育者の役割
- 13章 高齢期の非認知能力
- 14章 非認知能力の測定と評価
- あとがき